第2章 古代～中世の上総と坂田

大化の改新と周准郡丸田郷

四世紀から五世紀にかけて、近畿地方を中心に次第に勢力を拡大した大和朝廷は、六世紀に入ると、全国統一へ向けて大きく前進をしていった。そして、その大きな力となったのは、朝鮮や中国などを通じて伝えられた大陸文化の伝来であった。

すでに四世紀中ごろ、大和朝廷は大軍を朝鮮半島に送り、南部地域を占領、任那を置いて朝鮮半島支配の軍事的拠点としていたが、倭軍の派遣や任那支配を通じて大陸との交流が活発化し、養蚕や機織の技術、漢字、諸工芸などが日本に伝えられ、大和朝廷の勢力拡大とともに地方にも分散した。

六世紀に入ると、仏教も伝えられた。一般には、西暦五三八年、欽明天皇の時代に、百済の聖明王が日本に仏像と経典を贈ってきたときをもって仏教伝来と称している。しかし、鎌倉時代に書かれた『扶桑略記』という書物には、継体天皇のころに司馬達等と

■欽明天皇（五一〇～五七〇）

第二九代天皇。継体天皇の第三皇子。五三一年に即位し、この年から五三九年までの間は欽明天皇に対立して、安閑・宣化両天皇が列立していたと考えられている。治世中、国内では大伴氏失脚後、崇仏の是非をめぐって蘇我、物部両氏の対立があり、対外的には任那の日本府滅亡などがあった。陵墓は奈良県高市郡檜隈坂合陵。

いう人物が朝鮮から渡来し、西暦五二二年に大和国坂田原にお堂を建て、仏像を安置して念仏を唱えていたということが記されており、すでに五世紀末から六世紀初めには仏教が伝えられていたものと思われる。

仏教が伝えられた六世紀初め、大和朝廷は畿内をはじめ地方の諸豪族を支配下におさめ、中央権力機構をつくりあげていたが、王位継承をめぐって朝廷内で対立が生じたり、地方豪族の反乱が起こるなど、その支配は必ずしも安定したものではなかった。しかし、西暦五九三年（推古元年）、摂政に就いた聖徳太子は、仏教を国教とするとともに、冠位十二階を定め、さらに十七条憲法を制定し、中央集権国家へ向けて大きく前進させた。六二三年、聖徳太子が没すると、蘇我氏が一時権勢をほしいままにしたが、六四五年（大化元年）、中大兄皇子は、中臣鎌足と謀り、蘇我入鹿、蝦夷を誅殺し、新政府を樹立、翌六四六年、大化の改新の詔を全国に号令した。大化元年は、日本で初めて正式に年号が定められたときであり、大化の改新こそが真の意味の国家の成立を示すものであったのである。

大化の改新は、従来の氏姓制度による皇室および豪族の支配を否定し、中国の律令制度にならった国家制度を打ち樹てることを目的とするもので、まず天皇や豪族たちの私有地や私有民を廃止し、それらをすべて国家のものとした。

大化の改新によって、それまで総国（ふさのくに）と呼ばれていた房総地方は、上総と下総の二国に分けられた。千葉県南部が上総、北部が下総となったのは、当時、東海道は、神奈川県三浦半島から千葉県富津近辺に入り、君津近辺を通って市原、千葉、市川を通り、そこから常陸の国へ抜けていたためで、奈良の都に近いほうから上総、下総とつけられたこ

とによる。

須恵の国も分かれ、周准、天羽の二郡となり、国造は廃されて郡家（郡所）となった。周准の郡所は貞元村（小字赤磯――現在の郡）に新設された。

わが郷土坂田は、明治から昭和にかけて周西村に属していたが、それはこの周准郡の西部に位置していたからである。

大化の改新によって、郡の下に郷が置かれ、この郷の下は庄と名づけられた。周准郡は八郷に分かれた。

坂田は周准郡丸田郷に属した。

丸田は海に関連する名称で、現在の大和田あたりを中心とし、箕輪あたりから畑沢、大久保、人見あたりまで含めた郷と見られている。古文書によれば、奈良時代から鎌倉時代にかけて、丸田城というものが存在したとあるが、その所在地は判然としない。ただ大和田山からは奈良朝のものと思われる古墳が発掘されており、そこから推測して、それはおそらく大和田山あたりにあったのではないかと思われる。

大宝律令と農民の生活

大化の改新を推進させた天智天皇が死去すると、皇位継承をめぐり壬申の乱が起った。大友皇子を破った天武天皇が飛鳥浄御原に即位し、飛鳥時代が到来する。その後、六九七年に即位した文武天皇は七〇一年に大宝律令を制定、七一〇年には平城京（奈良）に遷都、奈良時代を迎えるのだった。

■上総の国府と周准郡と郷

上総国はいまの市原市能満に国府がおかれた。国は一一郡に分かれた。すなわち市原、上海上、畔蒜、望陀、周准、天羽、夷灣、埴生、長柄、山辺、武射がそれだった。周准郡は山家、山名、額田、三直、丸田、湯坐、藤部、勝部、勝川の九郷からなりたっていた。坂田は大堀、人見、大和田、畑沢、小浜、大久保、上烏田、下烏田とともに丸田郷に属した。

■壬申の乱（六七二年）

天智天皇の子・大友皇子と天皇の実弟・大海人皇子のあいだの皇位継承権をめぐる内乱。大海人皇子は吉野宮に隠棲していたが、天智天皇の死後、伊賀、伊勢を経て美濃に入り、東国を押えた。また別働隊は倭古京を占拠、近江勢多で大友皇子の軍を大破し、皇子を自害させた。翌年正月に即位して天武天皇となった。

大宝律令は、文武天皇が刑部親王、藤原不比等たちに命じて編さんさせた古代国家の基本法で、大化の改新で打ち出された新政策を法制化したものであった。

中央には二官八省が置かれた。二官とは太政官と神祇官で、太政官は政治・行政のすべてを統轄し、神祇官は朝廷の祭事をつかさどった。

太政官には太政大臣と左大臣、右大臣が置かれ、その下に中務、式部、治部、民部、兵部、刑部、大蔵、宮内の八省が配置された。このほかに都だけの政治を行なう京職と外交と九州の政治を行なう太宰府が置かれた。

そして地方には国を設置し、その下に郡と里があった。全国を七〇の国に分け、地方の政治をつかさどる国司は都から派遣されることになった。

大宝律令の最大の特徴は、私有地および私有民を廃し、公地公民制をとり、班田収授法を採用したことであった。これは中国の均田法にならったもので、土地（耕地）をすべて国家のものとし、一定年齢に達した人民には一定量の口分田を分け与え、その代わりに租・調・庸・雑徭などの一定の負課を課すというものであった。

口分田は、良民の男子二反（約二四アール）、女子はその三分の二、また賤民には良民の三分の一が与えられた。班田を行なうためには、人口の正確な把握と田地を一定の広さに分ける必要があった。このため、六年に一度戸籍調査が行なわれ、条里制によって、田地が一定の広さに区分された。

坂田字高坂に近い水田一帯、現在の井祐稔家の南側と鉄道線路にはさまれたあたりは、一ノ坪、二ノ坪、三ノ坪に分かれていた。それは、この条里制の名残りではないかといわれている。

■徭（よう）

支配者に対する力役奉仕をいう。大化改新以前は、陵墓の築造や屯倉（みやけ）の維持などは農民の力役奉仕によって行なわれた。律令制の歳役は京における一年一〇日間の労役をいい、雑徭は地方国府における一年六〇日間の労役をいった。

口分田を与えられた農民は、租、調、庸という三つの租税に苦しめられた。

租は収穫高の三％ぐらいの稲を、調は麻布、絹、海産物など土地の産物を、庸は都に出て労役に従う代わりに一定の布を納めるものである。これら租税の納入にあたっては、品物を都まで運んで納入しなければならず、その運搬も農民の負担であった。当時は船便も発達していなかったので、馬の背につけて都へ運んでいたが、上総から都まで往復にほぼ二カ月を要したといわれており、農民たちにとっては大きな負担であった。

このほか、雑徭といって農民は国司の命令で一年に六〇日以内の範囲で土木工事に従事しなければならなかった。また、二一歳以上の男子は、三人に一人の割合で兵士として召集され、都の警備や防人として北九州の防備に当たらなければならなかった。

天平一〇年（七三八年）に作成された駿河国の正税帳には、防人が帰国する際、同駅を通過した人数が記されている。それによると、安房三三名、上総二二三名、下総二七〇名で、この三つの国で五二六人となっている。防人は常備三〇〇〇名ぐらいで、毎年、三分の一が交替したといわれており、それから推測すると、防人の半数以上が安房、上総、下総の三国の出身者で占められていたことになる。事実、この地方からは多数の農民が防人として派遣されており、万葉集の防人の歌の中にはこの地方出身者の歌もいくつか収録されている。

征夷の兵站基地となった上総周辺

大和朝廷は六世紀には中部、関東地方を支配下に置き、中央集権国家を形成したが、

■上総出身の防人の歌

大君の命かしこみ出てくれば
　我ぬ取りつきて言ひし子なはも
　　―種泚郡上丁　物部竜

道の辺の歌の末にはほ豆の
　からまる君の離れか行かむ
　　―天羽郡上丁　丈部鳥

東北地方はまだ蝦夷と呼ばれた住民の居住地であり、朝廷の支配は及んではいなかった。そこで、たびたび征夷軍を派遣し、平定を試みた。道奥国をおき、六五八年には阿部比羅夫を大将として蝦夷を討ち、これを懐柔、さらに粛慎に侵攻した。しかし、その後も反抗が続き、朝廷の支配に服さなかったため、八世紀に入ると本格的な蝦夷征伐を開始した。七〇八年には出羽柵をおき、七一二年に出羽国を設置、出羽柵、多賀城を拠点として、蝦夷侵攻を繰り返した。

この蝦夷侵攻の主力部隊となったのが上総、下総、常陸など東国の兵士であった。いま記録に残されているだけでも、次のようなものである。

霊亀元年（七一五年）五月、上総ほか五カ国の農民一〇〇〇戸を陸奥開拓のため移住させる。

神亀元年（七二四年）、藤原宇合を持節大将軍として坂東九カ国の兵三万人に騎射陣法を習練させ、遠征軍は一応の成果をあげた。

天平九年（七三七年）四月、持節大使藤原仲麻呂を陸奥につかわし、上総、下総など六カ国の騎兵一〇〇〇人を発し、山海両道を開かせる

天平宝字三年（七五九年）九月、上総など七カ国より送られる軍士の器杖を雄勝、桃生の二城に貯える。

天平宝字三年（七五九年）十一月、従四位下藤原恵美朝臣、朝命をもって東海節度使として、上総など一二国を検定する。内訳は、船一五二隻、兵士一万五七〇〇人、子弟七八人、水手七五二〇人。そのうち二四〇〇人は肥前国（北九州）に、二〇〇人を対馬に配す。

■蝦夷地

蝦夷居住地、のちアイヌ人居住地をさす。華夷思想の夷狄観にもとづき、大和朝廷は中部地方以東の住民を「えみし」（蝦夷・毛人）あるいは「えびす」（夷）と呼んでいた。その後、支配地域が拡大するにつれて対象が変化し、平安時代には東北地方以北の住民を「えぞ」（蝦夷）と呼んだ。

宝亀七年（七七六年）七月、上総および三国に船五〇隻を造らせ、陸奥に用いて俘虜に備える。

天応元年（七八一年）三月、上総、下総、安房などの国に命じて、陸奥の軍所に穀一〇万石を遭送させる。

このように、再三再四にわたり、蝦夷征伐のため兵士、武器、食糧などが送られ、農民の生活を苦しめたのであった。

だが、蝦夷はしばしば反撃に転じ、その征伐は容易なものではなかった。とりわけ、八世紀半には強力な抵抗を示し、反攻に転じたので、これを鎮圧するため朝廷は延暦十三年（七九四年）大伴弟麻呂を征夷大将軍に任じ、大軍を派遣して鎮圧にあたった。

そして延暦十五年（七九六年）十一月には上総国など八カ国から、人民九〇〇〇人を伊治城（宮城県）に配置した。続いて延暦二十三年（八〇四年）正月の坂上田村麻呂による第四次征夷軍の動員に際しては、上総、下総など諸国は糒一万四三一五石、米九六八五石を陸奥国小田郡中山柵に運ぶことを強制された。

この量は実に房総三国の租税の約半分に相当したというから農民の苦しみは惨たんたるものであったろう。かくて農民たちは律令政府に対する不信の気持を日増に強めていった。公然と秩序破壊の行動に出る者たちも出現した。

武士団の出現と平将門の乱

東北地方で蝦夷征伐のための激しい戦闘が繰り広げられていたころ、桓武天皇は七九

■坂上田村麻呂（七五八〜八一一）

平安初期の武将。苅田麻呂の子で、七九一年（延暦十年）征夷大将軍・大伴弟麻呂の下に征東副使として蝦夷を討ち、次いで征夷大将軍となった。八〇二年、胆沢（いざわ）に築城、鎮守府をここに移し、蝦夷地平定に大きな功績を残した。その一生は模範的武将として尊崇され、征夷大将軍の職名は長く武門の栄誉とされた。

■丸子廻毛の反乱

征夷軍は、多数の蝦夷たちを浮囚（捕虜）として連行し、さまざまな労役に従事させたが、浮囚たちは再三にわたって反乱を起こした。

嘉祥元年（八四八年）二月、上総の浮囚・丸子廻毛（わたつ）らが反乱を起こしたので、朝廷は上総・相模・下総・上野など五カ国に勅し、討伐させた。

また、貞観十二年（八七〇年）には、朝廷は上総国司に対して、夷種を教喩し、背反するものは奥地に追い、良民に危害を与えないように命令している。

四年（延暦十三年）、都を奈良から京都に移し、平安時代が始まった。

唐の長安をモデルとした平安京は、以後、鎌倉幕府が開かれるまで約四〇〇年にわたって日本の都として栄えることになる。その間、平安文化と称される華麗な貴族文化が花開き、日本独自の文化が育っていく。

しかし、このころになると、律令制による班田収授法は次第にゆるみ、土地の私有制が復活してくる。「荘園」という貴族や寺院の所有地がそれである。

班田収授法では、六年ごとに戸籍調査を行ない、口分田を与えることにされていたが、人口増にともなう土地不足から、農民に与えるべき口分田は次第に不足することになった。このため、朝廷は三世一身法を制定、土地の部分的私有制を認めることによって開墾を奨励した。しかし、それでも土地不足は解消せず、七四三年（天平十五年）には、墾田永世私財法を実施し、新規開墾地を私有地として許可する政策をとった。これによって資力のある貴族や寺院は農民たちを使って土地開墾をすすめていった。こうして初期荘園といわれる私有地が生まれ、全国に広がっていった。九世紀に入ると、土地公有制はますます乱れ、天皇家自ら広大な勅旨田や親王賜田を設定して墾田経営を積極的にすすめるまでになっていった。そして一〇世紀になると、農民たちは租税負担をまぬがれるために、新しく開墾した土地を中央の貴族や寺院に寄進し、一定の年貢を納める代わり自ら土地を経営するようになっていった。後期荘園あるいは寄進地荘園と呼ばれるものがこれである。

上総地方にも多くの荘園が営まれたが、ここ坂田にも荘園があった。

長福寺住職、諏訪祐慶師の研究によると、現在の君津駅を東端として、西は伽藍のあ

■上総に配置された検非違使

清和天皇の貞観九年（八六七年）十二月に上総国に検非違使一人を置き、帯剣して笏を把ることを許された。これは盗賊・凶徒などの多かったためであり、当時の社会状態もおよそ想像がつく。この二年後には、下総にも置かれた。

たりまで、内房線をはさんで坂田と中野にまたぐ地域に、〝すえの西荘〟と称された初期荘園が営まれていたという。そして、平安期になると、その北側、ちょうど現在の西坂田地区にあたるところが平安坂田拡張地として新たに荘園化されたという。大関谷が造築されたのもそのころのことといわれており、あるいは、この坂田拡張地の水源として設けられたのかもしれない。しかし、それを証明するに足る確たる資料は残されていない。

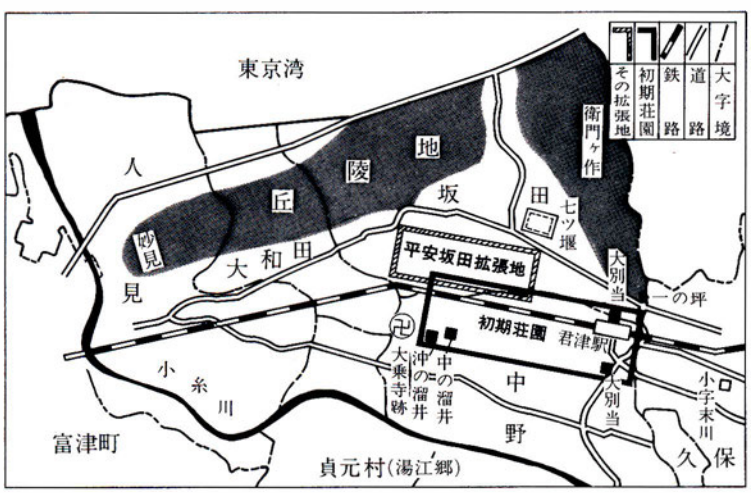
荘園化による土地私有制が広がる中で、農民たちは自衛手段として武器をもち団結した。地方の豪族たちもまた農民を指導しながら自らの勢力の拡大をはかった。ここに武士団が生まれ、新たな力を蓄積していく。そしてその棟領として台頭してくるのが源氏（清和源氏）と平氏（桓武平氏）である。

これら武士団は荘園の争奪をめぐって抗争を繰り返していたが、なかには公然と朝廷に反抗するものも出てくる。その一人が下総を中心に関東地方一円を支配下に収めた平将門である。

将門の祖父にあたる高望王（たかもちおう）は桓武天皇の曽孫であり、寛平元年（八八九年）のころ姓を平氏と賜わって上総介（国司の次官）となって派遣されて、この地にやってきた。

高望王には良望、良将、良兼、良文、良正などの子供があり、いずれも土着の豪族として勢力を拡げ、関東平氏の力を強大なものにした。

その良将の子が将門であった。将門は、下総地方（現在の茨城県下妻付近）を本拠として勢力をふるっていたが、父の遺領をめぐり一族と紛争を起こし、九三五年（承平五年）、伯父の平国香を殺害、おじの良兼、良正、国香の子貞盛らの攻撃を受けたが、これ



坂田の荘園（諏訪裕慶師による）

を破り、常陸、下野、下総一帯を支配下におさめた。そして武蔵権守興世王と謀り、関八州を併せようとして常陸、下野、上野の国府を陥れ、自ら新皇を名乗り、茨城県岩井に王城を築き、文武百官を任じ、一族を関東の国司とし、朝廷に公然と反旗をひるがえした。この将門の乱（天慶の乱）により、関東地方は一時騒然たる状況となったが、朝廷は藤原忠文を征討大将軍に任じ将門を破り平定した。

将門の勢力は上総にまでは及ばなかったが、下総、上総はいずれも平氏一族の支配下にあり、上総地方にも大きな衝撃を与えたのであった。

平忠常の乱と上総農民の疲弊

将門の乱のあと約一〇〇年近くは、上総から下総にかけて比較的平穏の時を過ごしていたようである。そしてその間、農機具の発達や農法の改善などにより、土地の生産性も徐々に向上し、農民の生活にも若干ながら余裕も生まれてきたようである。

上総、下総をはじめ関東地方一帯では平氏一族が勢力をふるい、新規の開墾をすすめ、それらの開墾地を荘園化していった。上総地方でも多数の荘園が営まれ、中央の貴族や寺院に寄進された。そして、それらの荘園を基礎として、武士団の力は次第に強まっていった。

関東を支配した武士団の大きな特徴は、騎兵武士団であったことである。関東一帯を勢力下に置いた平氏一族は、上総から下総、下野、上野にかけて牧野を拓き、多数の馬を飼育していた。そして、一朝事あるときには、騎兵武士団を組織して戦闘に臨んだ。

このころには、坂田近辺でも多数の馬が飼育されていたといわれ、馬にちなんだ地名がいくつか残されている。

これら関東の武士団は、荘園の所有権や支配権をめぐりしばしば抗争を繰り返していたが、万寿四年（一〇二七年）から長元四年にいたる五年間、房総三国がほとんど亡国と化するほどの大乱が起こった。平忠常の乱がそれである。

忠常は高望王の曽孫・忠頼の長子であった。彼は上総介、武蔵押領使、下総権介として羽振りをきかせて、朝廷から送り込まれた国司さえも無視するほどの猛威を振るっていた。

ところがこの年、にわかに朝廷に対して反乱を起こしたのであった。

忠常はたちまち下総の国府に乱入し、直ちに南下して安房国を攻め、安房守惟忠を焼殺した。これに対して朝廷は、平直方、平政輔を追討使に任じて討たせたが、追討軍は反乱軍の猛威の前に手も足も出ない状況であった。そこで一〇三〇年、甲斐守源頼信を追討使に任じて討たせることにした。これを聞いた平忠常は、追討軍の到来を待つことなく、自ら頼信の居所におもむき降伏、京都に護送される途中、美濃において病没した。反乱を起こして以来四年余り、度重なる追討軍との戦いで兵力を損耗し、また農民たちの生活も困窮をきわめていたため、自ら降伏の道を選んだものといわれている。

しかし、わが郷土の農民たちはこの争乱によって想像を絶するほどの疲弊を強いられることになった。左大弁源経頼の日記『左経記』には上総守辰重から聞いた話が記録されている。

上総国は本田二万二九八〇町歩余あったが、戦乱の終わりのころに、国司平維時が調

■平安中期の房総三国の田数と収穫

（『君津町誌』より）

醍醐天皇の延長年中勅選した『和名抄』によれば、房総三国の田数は、

安房国　四三三五町八反五五歩
上総国　二万二八四六町九反二三五歩
下総国　二万六四三二町六反二三四歩

であった。

大化の改新後文武天皇の慶雲三年（七〇六）に、あらためて一反につき一束五把となったので、一反の粗米は七升五合、現在の枡目の量では三升である。以上を計算の基として三国の収穫と田租とを算出すると次のようになる。

	収穫稲	租稲	収穫米
安房国	二六・七九五束	六五・〇三七束	一〇八・三九五石
上総国	一二四・三〇〇	三四・二〇七	五七・一一五
下総国	一三二・三五〇	三九六・四〇九	六六九・八一七

査したところ、実際に耕している田は、わずか一八町歩余にすぎなかった、という。「追討のことによって、亡弊甚しく、民は逃散し、道路に家なく、国司も飢餓に及び、妻女も憂い死ぬ惨状で、安房、上総、下総は已に亡国」の状態だったという。そしてこの三国はこの乱後四年間、官物上納が免除されたというのであった。

この反乱が長期にわたったのは房総の民衆が律令国家の重租に対して抵抗し、忠常を支持する気持があったからではないか、ともいわれている。このため、忠常が死んだ後も、その子孫には何のとがめもなく、上総氏、千葉氏としてそれぞれ領地を与えられ、上総、下総一帯に勢威をふるうことになった。

桓武平氏の台頭と源頼朝

将門に殺害された伯父の国香には長子・貞盛がいた。貞盛の子・維衡は伊勢の国守をつとめ、荘園を持ち、その三代後が正盛である。

正盛は白河上皇の信任が厚く北面の武士の中心的存在となった。その長子・忠盛は瀬戸内海を制圧し、宋との貿易に成功し、朝廷に貢献した。勢力はさらに拡大し、彼は宮中の清涼殿に登ることを許されるほどになった。

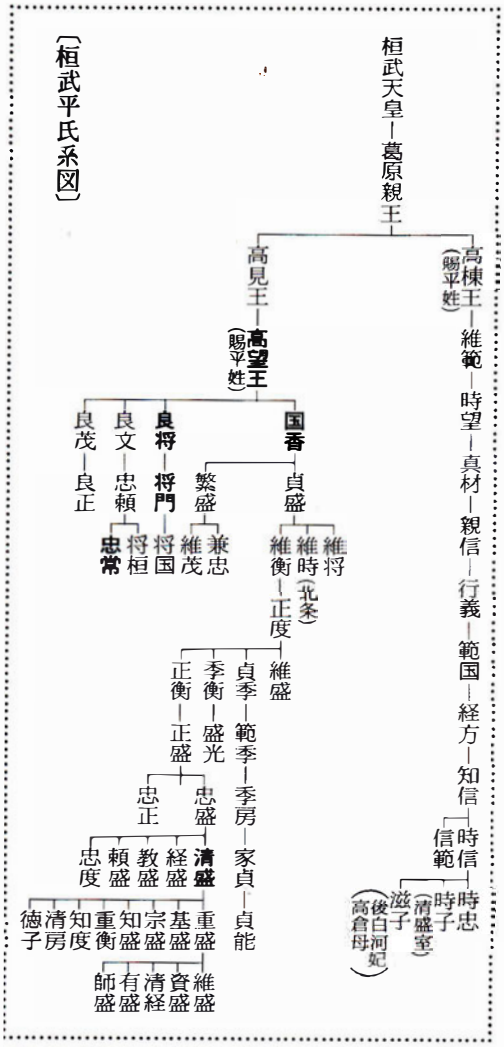
保元元年（一一五六年）、京都を舞台にして、後白河天皇と崇徳上皇の間で、天皇位譲渡をめぐって対立、ついに武力による衝突に発展した。保元の乱である。後白河天皇方には平清盛が源義朝と結束してつき、崇徳上皇方には清盛の叔父・平忠正が、義朝の弟・為朝が中心となった。その結果は天皇方の勝利に終わり、崇徳上皇は讃岐に流され、

その他の武将は死刑に処せられた。

ところがその三年後の平治元年（一一五九年）、清盛が熊野参詣のため京都から離れたとき、その隙をついて清盛と対立していた藤原信頼が源義朝と組んで兵を挙げた。後白河上皇と二条天皇を皇居に封じ込めたが、その急変を聞くや清盛は飛んで帰り、やがて反撃に転じて信頼、義朝ら反乱軍を打破した。平治の乱である。

清盛軍に破れた義朝は尾張で殺され、その長子・頼朝はこのときまだ一三歳の少年であったことを理由に伊豆に流された。その弟・義経（二歳）は京都の鞍馬寺に預けられた。

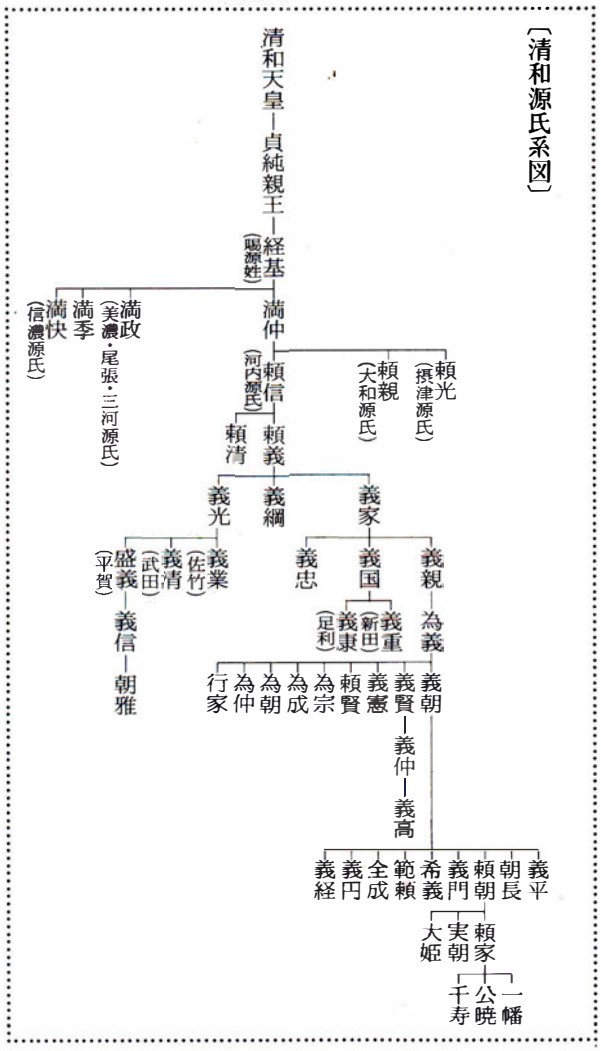
平治の乱後、清盛は太政大臣となった。平氏はそのころ全国におよそ五〇〇の荘園を



所有し、「平氏にあらずんば人にあらず」の威勢をほしいままにした。清盛は本来、武士でありながら貴族政治の中枢に坐り、時代は貴族社会から武家社会へ移り変わろうとしていた。

平治の乱に破れた義朝の長子・頼朝はそれから二〇年余の歳月を伊豆の流人として送った。ときに治承四年（一一八〇年）のことである。すでに三四歳になっていた頼朝は後白河法皇の皇子・以仁王（もちひとおう）からの令旨を受けとったのだった。以仁王は清盛ら平氏の傍若無人のふるまいに立腹し、源頼政とともに平氏打倒の旗をかかげたのだった。令旨はその計画に頼朝も参戦せよというものだったのである。頼朝はこのとき北条時政の娘・

〔清和源氏系図〕



政子と結婚して北条氏の保護のもとにあった。以仁王と頼政は結局、平氏に追われ宇治の平等院で戦死したが、この令旨を受けた頼朝はただちにこの事実を諸国の源氏に通報して協力をうながした。

まず頼朝は北条時政とともに伊豆の目代（国司の代官）山木兼隆を三嶋大社の祭礼の日に奇襲をかけてこれを打ち破った。しかしその直後、石橋山の戦いで頼朝軍は大庭景親軍に破れ、真鶴岬から安房の勝山へ小舟で逃れてきた。治承四年八月、頼朝に従って敗走してきたのは北条時政、三浦義澄、安達盛長などわずかの手勢であった。

上総権介・平広常の不運

安房に逃れてきた頼朝は、当時、上総一帯に大きな勢力をもっていた上総権介・平広常と千葉介・千葉常胤を頼りとした。安房、上総の豪族たちはいずれも源氏派であり、その嫡流の頼朝の召集にはなんらの異存もなく、とりわけ千葉常胤は一族郎党をあげて参陣し、苦境の頼朝に深い感銘を与えたのだった。

だが、一方の広常はいささか峻巡気味であって、参陣は常胤より二日もおくれた。周東、周西、伊南、伊北、庁南、庁北出身の兵、ほぼ二万余の大軍をもって馳けつけたが、頼朝は必ずしも快しとしなかった。

広常は頼朝がもし、将として優れた人物でなければ、ただちに討ちとって、その首を平氏に献ずるつもりだったという。しかし案に相違し、頼朝の人格にすっかり感服し、たちまち害心を払拭して和順したのだが、頼朝にすれば、この広常の出方を面白く思う

はずはない。遅参をとがめて、そのときの感情を後々まで根にもつのだった。

頼朝は安房、上総、下総を経てふたたび鎌倉に入ったが、そのときには、すでに五万の軍勢にふくれあがっていた。平氏の横暴なふるまいに不満をもっていた関東武士の怒りが一挙に爆発したのであった。

いち早く頼朝の旗下に馳せ参じた千葉常胤は頼朝から絶対の信頼を得て、その後、鎌倉幕府草創には重要な立場に置かれるに至った。

鎌倉に入った頼朝はその後、富士川の夜戦で平維盛軍を撃退し、次いで北関東の雄族・佐竹秀義を帰服させて、東国はなだれを打って頼朝の支配下にはいった。

養和一年（一一八一年）、平氏の総帥・清盛は病に倒れ、六四歳で他界した。跡を継いだ宗盛は源氏征伐の軍を出発させ、美濃国で源氏を破ったが、二年後には木曽義仲に礪波山の倶利加羅峠の夜戦で敗退した。義仲はその勢いで入京し、後白河法皇から平氏追討の命を受けたものの、折からの凶作と食糧の欠乏で動きが止まってしまった。

一方、頼朝は態勢をたてなおし、弟の義経に軍勢をあずけ京に向かわせた。これを知った義仲は、後白河法皇を幽閉し、自ら征夷大将軍を名乗った。しかし源範頼の率いる六万の大軍はこれを宇治川において破り、義仲は戦死した。

この源氏軍と義仲の戦いの間に平氏は再度勢いをとりもどし、瀬戸内海一帯を支配下におさめ、元暦元年（一一八四年）には早くも福原付近まで進出した。だが源氏はそれを許さなかった。一の谷で義経の奇襲を受けた平氏はあえなく敗走、半年後に屋島にのがれたものの、文治元年（一一八五年）に義経軍はこれを追撃、壇ノ浦において平氏はついに全滅するにいたった。

この間、元暦元年に頼朝は鎌倉に公文所、問注所を設置、次いで翌一一八五年には、守護、地頭を任じ、鎌倉幕府の基礎を築いた。そして建久三年（一一九二年）には征夷大将軍に任じられ、武家政治が本格的にはじまった。

上総権介・平広常は相変らず頼朝にうとんじられていた。広常は元来、無骨な性だったらしく、それだけに地元の武士や農民からしたわれていたが、その言動は源氏の総大将である頼朝に対しても変えようとしなかった。

頼朝の広常に対する猜疑心はつのるばかりであった。そしてついに寿永二年（一一八三年）十二月、とるに足らぬ理由で広常は鎌倉の営中で誅されたのだった。周東、周西、天羽から広常に従って一〇〇〇騎、五〇〇騎、三〇〇騎と、小豪族や小棟梁に率いられていった若い「武者（むさ）」や「兵（つわもの）」たちの失望ははかり知れず、去就に迷ったであろう。広常の嫡子・小権介良常もこのとき自刃し、領地は、千葉常胤と和田義盛に分賜された。

坂田右衛門ケ作の住人・藤原忠光

祇園精舎の鐘のこゑ、諸行無常のひびきあり、沙羅双樹の花のいろ、盛者必衰の理をあらはす、奢れる人久しからず、ただ春の夜の夢のごとし、猛き者もつひには亡びぬ、ひとへに風の前の塵に同じ――。

奢れるものの無常を連綿と綴った「平家物語」はあまりにも有名である。ところでその一段に、頼朝による鶴岡八幡宮建立についてのくだりがある。大略するとこうだ。

建久三年（一一九二年）の正月二十一日、頼朝は鶴岡八幡宮の建立工事を見に行った

とき、その普請場のすみに一人の左眼の盲いた、すごい形相の男がいた。それを認めた頼朝は即座にその男を捕縛させ、名乗らせた。上総五郎兵衛尉とその男はいい、壇ノ浦で破れた旧主の仇を討たんとして侵入したことが判明した。頼朝は和田義盛に命じて、これを斬らせ、武蔵の六浦にその首をさらした。

ところがこの上総五郎兵衛尉は、実は藤原忠光であった。壇ノ浦で全滅した平宗盛に仕えて源氏と戦った武将で、彼の父は藤原忠清（「平家物語」では平忠清）であった。

忠清は伊勢古市の人で、初め伊藤五といい、右衛門尉になり、関八州の侍奉行をつとめ、後に上総介になった。忠清には三人の子供があった。上から忠綱、忠光、景清といった。

そして次男の忠光の住居が、実はわれわれの郷土・坂田にあった、という説がある。坂田字右衛門ケ作と畑沢との境をなしている字古屋敷の一帯がそこであったという。

忠清はもとは上総・須恵に生まれた。父が早く伊勢古市に移ったので、彼も若くして伊勢に移った。名前も、伊勢にいる藤原氏の五郎兵衛というところから伊藤五と称したのだった。伊藤五の二、三代前は上総に住み、前出の高望王の子・良繇がその遠祖ではないかといわれている。良繇もまた上総介に就いた人物だが、そのころにこの坂田と畑沢の地を開拓し、領有して支配した。それから数代続くうちに、須恵の三直（みの）あたりを領有していた藤原氏と縁戚関係となり、忠清らの代には都合の良いときには平氏を名乗り、悪いときには藤原氏を使用したのであろう。

忠常の長元の乱ののち、この一帯は実に混とんとしていた。忠常の子・常将は忠常を鎮めた源頼信の斡旋で勅免をこうむり、上総国司となった。そして常兼、常満、常家と

坂田右衛門ケ作付近略図（『君津町誌』より）

代は継がれ、常家（別名を上総介坂田太郎といった）の代に千葉氏と上総氏とに分立、同族ながら下総と上総をそれぞれ世襲することになったのだった。

上総は常家のあと常明、常隆と受け継がれ、保元、平治の乱のころには、常隆の子ですでに上総権介になっていた広常だったのである。

〔千葉氏系図〕

高望王―良文―忠頼―忠常―常将

常長（上総権介 武蔵押領使）

常兼（千葉介 常陸守護職）

常満（上総権介）

常房（鴨根三郎）

常遠（安西四郎）

頼常

常晴（相馬五郎）

常継（周防八郎太夫）

常仲

常重（千葉太介）

常家（上総権介）

常康（白井太郎）

常広（通殖八郎）

常衡（海上与市）

胤光（椎名太郎）

常胤（上総介 千葉介）

常明（上総権介）

常隆（上総権介）

胤政（千葉介）

師常（相馬次郎）

胤盛（武石三郎左衛門）

胤信（大須賀四郎）

胤通（国分五郎左衛門）

胤頼（東太郎太夫）

日胤（律静坊）

常景（伊西新介）

常茂

常成

常吉（周東太郎）

常泰（周西次郎）

広常（上総権介）

直胤（天羽庄司）

常清（相馬九郎）

頼次（金田小太郎）

平常家→坂(佐賀)太郎(下総国香取郡坂村)
平常隆→上総坂太夫.

平治の乱のあと、藤原忠清は生まれ故郷の上総国須恵の畑沢所領地に帰ってきた。だが、この一帯は平治の乱で苦杯をなめた広常一族が所領を持ち勢力を張っていたことから、忠清はやむなく畑沢の向こう山の中腹、すなわち坂田字右衛門作と字古屋敷あたりに武家造りの館を新造した。新造が終ると忠清は、そこに次男の忠光を住まわせ、三男の景清を望陀地区の荘園にとどめて、自らは急ぎ京に戻った。

須恵はそのころ周東と周西に分かれていた。上総権介・常隆はその弟・常茂の長子・常吉を周東に、次男の常泰を周西に配して、それぞれを周東太郎常吉、周西次郎常泰（別名を助忠）としたのだった。保元、平治の乱のときは、この両名はいずれも広常とともに戦場を馳駆したわけで、忠清の所領はこの両乱における敵の背中合わせとなっていたのだった。

忠清は京へ戻るとすぐ右衛門尉となった。その後、関八州の侍奉行となり、治承三年（一一七九年）十一月には、晴れて上総国司に任ぜられた。だが、翌治承四年十月二十日、平氏方の勇将として富士川の戦いに参戦し、敗走する破目におちいった。それからの忠清は世をはかなんで剃髪したといわれているが、その消息はたち消えてしまった。

頼朝の命で和田義盛に仕置きにされた忠清の子・忠光の遺髪は同族の者の手で、坂田の地に持ち帰られ、ひそかに葬られたという。

ちなみに、わが郷土・坂田の地名の由来だが、広常の父の上総権介・常隆が別名を上総坂太夫と名乗り、この地を支配していたところから、その地名が起ったという説がある。それに対して、常隆は坂田を支配するようになったので、逆に坂太夫を名乗ったという見方もあり、その真偽については不明である。

平治の乱
平治元(1160)

北条政権に嫌われた千葉氏

頼朝は鎌倉開幕のあと一四年目の建久九年（一一九八年）に五三歳で没した。政権はその後、頼家、実朝と継がれたが、承久一年（一二一九年）一月末、実朝は前将軍・頼家の遺児・公暁（くぎょう）に鶴岡八幡宮で暗殺された。この暗殺によって源氏の政権はわずか三代で終えんしたのであった。

実朝の横死の後、摂政九条家の出である藤原頼経が将軍となった。その二年後の承久三年の五月、後鳥羽上皇は近国の兵一七〇〇余騎を召集して、幕府の実力者・北条義時追討を命じた。そのとき鎌倉の御家人・三浦義村がかねてより北条氏に反感を抱いているという情報を得て、上皇は三浦氏を味方にすべく使者を差し向けた。しかしその策略は裏目に出た。義村は上皇方の密謀を義時に通報してしまったのである。

それを知った義時はその子・泰時に命じてただちに大軍を京に派遣した。上皇方はこの大軍にあっけなく破れ、後鳥羽上皇は隠岐に、順徳上皇は佐渡に流された。これが承久の乱である。

この乱に加わったのが上総国守・藤原秀康であった。秀康は北面の武士であり、上総国守に任ぜられたのは承元四年（一二一〇年）六月のことだった。その前年の承元三年にはすでに北条追討の計画は打ちたてられ、秀康もそれに参加していた。むしろ義時を誅することの筆頭格であったことから、上総国守の就任は、その反幕体制の拠点として上総国が選ばれたのではないかと、歴史家たちは推察している。

義時の弟・泰時は承久の乱の後、京都にとどまり、六波羅探題として朝廷を監視、京

都の警備と西国の政務を行なった。この乱によって貴族の政権はまったく失脚した。北条氏はそれから代々が政所と侍所の長官を兼ね、名実ともに武家政権を掌中にしたのだった。

寛元二年（一二四四年）、幕府は六歳の藤原頼嗣が将軍職に就き、父の前将軍・頼経はわずか二六歳の若さで引退、髪を断ち行智と号した。北条氏の策にほかならない。寛元四年四月には北条時頼が執権となり、このとき巷にはふたたび北条氏討伐の風説が流れた。その首謀者は北条朝時の子・名越光時と朝時の信頼を得ていた千葉秀胤であるといわれた。それに対し時頼は、その機先を制しようとばかりに兵を集めたのを知り、光時は恐れをなし断髪した。六月には伊豆に配流の身となり、千葉秀胤は上総国に追い下された。頼経は帰京を命じられたが、それに同情したのが三浦泰村。泰村はひそかに安房、上総などにある所領を通して兵器を運び込み、北条打倒の準備をはじめた。しかしこれも時頼の知るところとなり、宝治元年（一二四七年）六月、泰村は兵の解散を余儀なくされた。その機に乗った三浦氏のライバル安達景盛一族は突然、泰村を襲い、この急襲で三浦一族五〇〇余名は、頼朝の御影堂で自害した。

一方、泰村の妹婿として泰村に加担した千葉秀胤は幕府の追討にあい、その一族は上総一宮の大柳館に押し込められ、自ら火を放って、これまた自殺したのであった。秀胤の遺領埴生荘（成田市）は足利氏を経て、建長二年（一二五〇年）には義時の孫・北条実時に分賜された。

北条政権は、かつて頼朝の寵を受けた房総の雄族千葉氏にはなにかときびしくあたった。上総でも周東の諸村、たとえば木更津郷や土宇郷などは、北条氏の息のかかった鎌

■千葉秀胤・時常兄弟

『吾妻鏡』によれば、秀胤の弟である下総次郎時常は、父常秀の遺領として下総国埴生荘（成田市）を伝領していたが、兄の秀胤に押領されて憤慨していたという。しかし、この宝治合戦において兄の危急にさいして、心機一転、大柳の館に馳せむかい、秀胤一族とともに自殺、兄弟ともに火中に死骸をならべ、勇士の美談とたたえられた。まさに鎌倉武士の同族意識のつよさを示した事件であった。

■宝治合戦後の千葉氏

この「宝治合戦」では千葉氏の多くが三浦側に属して、氏族の印東、臼井、大須賀などの諸士が討ち死したり、捕えられたりした。秀胤一族の焼身自殺で事件は一応落着したが、「夷を以て夷を制する」北条政権の巧妙な策謀によって、千葉氏は一族全体として次第に勢力を弱めていった。とりわけ、北条政権の追討対象にはならなかったが、つねに外様的な位置に立たされていた。

倉の称名寺の寺領にしたり、千葉氏はじわりじわりと封じ込まれていったのである。

元寇と鎌倉幕府の終えん

文永・弘安の二度にわたる元寇は、その舞台が遠く離れた九州で起ったのにもかかわらず、房総地方にも重大な影響を与えたのだった。

その昔、頼朝と肝胆相照らす主従関係にあった千葉常胤は、九州遠征の功により、肥前国小城郡の地を賜わったが、その常胤より四代後の頼胤は文永の元寇の際、出陣して戦死した。頼胤には宗胤、胤宗の二人の子供があり、宗胤は家督をつぎながらも次に訪れた弘安の元寇のとき父と同じように九州に在駐し、不運にも父と同じ運命をたどった。本来なら千葉氏はその宗胤の子・胤貞が継ぐべきであったが宗胤の弟・胤宗は胤貞が幼少であることを理由に実権を握り、彼の子・貞胤を千葉介として胤貞らを冷遇した。

そして元寇が去って三年後、千葉介貞胤は北条討伐の戦乱の際、南朝の将として参加し、胤貞は北朝について敵味方に分かれる運命となった。千葉氏の結束はくずれ、一族は二分して対決することとなってしまった。

元寇はわが国を未曽有の困難におとしいれた。さいわい暴風雨により元軍の上陸、本土占領は免れたものの、九州防備に狩り出された武士の疲弊ははなはだしいものであった。反面、幕府には恩賞として与えるべき土地はなく、武士たちの不満はつのっていった。それとともに、北条氏の執権政治も揺らいでいった。

この機に乗じて後醍醐天皇は天皇親政を復活するべく、ひそかにその準備をすすめて

いた。ところがこの策略も事前に幕府の知るところとなり、幕府は足利尊氏（当時は高氏といった）に命じて、大軍を京都に差し向けた。この軍の中には胤貞が、相馬右衛門次郎など千葉の武士団とともに先陣をきって参戦した。

ところが尊氏も策士であった。西征の途中、天皇方に密使を送り、天皇の命を受けることに成功し、丹波路にさしかかったとき、彼はにわかに幕府・北条氏に反旗をひるがえした。そして元弘三年（一三三一年）には、尊氏の大軍は六波羅探題の北条仲時を一挙に攻め落したのだった。

尊氏の反旗にわずかに遅れて、関東では新田義貞もまた北条氏打倒に立ちあがった。義貞は多くの関東武士団と糾合し、鎌倉をめざして南下し、ときの将軍・高時以下八七〇名を追いつめ、北条氏の墓所である鎌倉の東勝寺において全員を自決においやった。かくして、頼朝以来一五〇年の鎌倉幕府は滅亡した。

南北朝と上総の支配者たち

後醍醐天皇は楠木正成、名和長年らを従えてふたたび朝廷にのぼり、北条が擁立していた光厳天皇を廃した。

北条討伐の功労者・足利尊氏は鎮守府将軍に、そして征夷大将軍には護良親王がそれぞれ着任し、天皇による公家統一の政治がスタートするかにみえた。

しかしこの元弘の乱後、天皇方が厚く遇されたのに対し、武士方はきわめて薄情な措置がとられた。それがまた武士の不満をあおり、鎮守府将軍・尊氏も武家政治の復活を

■足利尊氏（一三〇五～一三五八）

室町幕府の初代将軍。初名は高氏。源氏再興の志をいだき、元弘の乱で幕府軍として西上したとき、丹波桑田郡（現亀岡市）篠村八幡宮で反旗をあげ、六波羅探題を滅ぼした。建武新政第一の功臣として参議・武蔵守となり、後醍醐天皇の名の一字を賜ったり、尊氏と改名。一三三五（建武二年）北条時行の乱鎮圧のため鎌倉へ下り、次いで新田義貞征伐を名目として建武政権にそむき上京。翌年、北畠顕家らに敗れ、九州に落ちたが、ただちに再挙東上して湊川に楠木正成らを破り、京都に入って光明天皇を擁立した。一三三八年（延元三年）には征夷大将軍に任ぜられ、京都に室町幕府を開設。

狙った。その尊氏の挙動を不審に思った護良親王は尊氏をしきりに非難し、この両者の激突を迎えることになった。尊氏は護良親王軍を破り、それを捕えて鎌倉に幽閉した。

建武二年（一三三五年）のときである。鎌倉幕府の執権・北条高時の子・時行は信濃において挙兵し、即座に鎌倉に攻め入り、尊氏の弟・足利直義を敗走させた。この混乱のなかで護良親王は土牢中において殺害された。直義の敗走を聞くや、京都にいた尊氏は朝廷の許可を得ぬままに、自ら征夷大将軍を名乗り、軍を率いて鎌倉奪還のために出立した。途中、直義と合流し、またたく間に相模川において時行軍を破り、奪還に成功した。

しかし後醍醐天皇は、この尊氏の独断専行を反逆行為としてとがめた。そして新田義貞に尊氏討伐を命じたため、天下はまたまた戦乱の世と化した。

それから三年、足利尊氏と新田義貞の死闘は続く。その過程において、後醍醐天皇の信頼する楠木正成は摂津湊川で討ち果て、天皇は比叡山に逃れた。尊氏は反後醍醐であった持明院統の光明天皇を擁立し、延元三年（一三三八年）、尊氏は正式に征夷大将軍に就いて、室町幕府を開いたのであった。

だが、尊氏が京都で武家政治を復活させた後も、陸奥、越前、和泉、河内、伊勢、九州などでは有力武士が依然として健在で、一方、比叡山に逃れた後醍醐天皇も京都を虎視眈々と狙い、決して安泰とはいえなかった。それから六〇年の間、世は吉野を南朝、京都を北朝として、激しい争乱が続いた。

武士同士の領地奪取の戦い、さらに足利氏内部の内紛も絶えなかった。

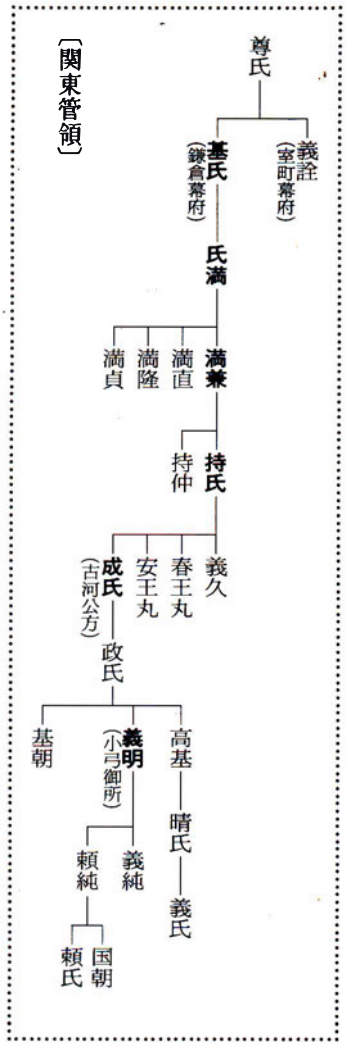
尊氏は京都・室町幕府に長子・義詮を置き、鎌倉には千葉、小山、長沼、結城、佐竹、

小田、那須、宇都宮の八家を統制する機関「関東管領」を設置、そこには義詮の弟・基氏を配置した。基氏は幼年時代、子供のない直義（尊氏の弟）に育てられ、あたかも実父のようにしたっていた。そのため直義は基氏が関東管領に就いた後、彼はその後見人のような立場にたち、やがて関東の実力者にのしあがっていった。

尊氏はこの関東の実力者にわかに猜疑心を抱いた。それがもとで尊氏、直義兄弟の仲は急速に不和となり、尊氏は直義を毒殺した。危険を感じた基氏まで、一時は安房に身をひそめるほどであった。

関東の実力者である直義は単に実力だけでなく、その人柄から関東武士団からの支持が厚かった。そこから直義が滅ぼされた後、関東武士団は、基氏をたてて反将軍の気概を胸中に秘めることになった。関東管領はその後、基氏から、氏満、満兼へと継承された。そしてこれを補佐したのが執事・上杉朝宗、上総国を本拠地とした犬懸上杉氏の総領であった。

このころ関東管領は〝本家〟の京都の室町幕府にならい、主帥を「公方」と呼び、執



■**足利直義**（一三〇二～一三五二）

尊氏の同母弟。元弘の乱には尊氏と行動をともにし、建武新政で相模守となり鎌倉に居住。一三三五年（建武二年）には護良親王を殺し、翌年、尊氏にすすめて挙兵し、京都に攻め入った。しかし九州に敗走、同年ふたたび上京し、尊氏が幕府を開くと、補佐して諸政を行なう。一三四九年には高師直と争い、次いで尊氏とも不和となり、鎌倉で毒殺された。

■**足利基氏**（一三四〇～一三六七）

尊氏の子。一三四九年（正平四年）、嫡兄義詮にかわって初代鎌倉公方となり、南朝方の新田義興を滅ぼし、また勢いをのばした家臣の畠山国清を討ち、上杉憲顕を管領とし、また越後の守護とするなど、室町幕府の関東における地歩を固めた。

事を「管領」と称し、支配地を関東八カ国と甲斐、伊豆としたのであった。上杉朝宗は氏満、満兼の後見人的存在で、長年、「管領」をつとめた。関東管領は別名、鎌倉府とも呼ばれ、朝宗もまた実力者として浮上したものだった。とりわけ満兼は幼いときから朝宗に育てられ、その意味でも七〇歳の高齢になっても朝宗はなお力をふるっていた。朝宗の子・上杉氏憲（別名・禅秀）も父の後を継いで管領となった。

しかし禅秀の代、上杉氏は犬懸家と山内家が鋭く対立、公方・持氏の時代には山内家の上杉憲基を支持した持氏から、禅秀はむしろ冷や飯を食ったのだった。

そのころ室町幕府では、将軍職をめぐって義持と義嗣の兄弟がするどく対立し、義持の将軍就任の決定に不満をもった義嗣は挙兵した。このとき義嗣は鎌倉公方の持氏の叔父である足利満隆に使者を出し、持氏にうとんじられた上総の禅秀と結束して挙兵することをうながした。禅秀の娘は千葉介兼胤の妻となっており、当時、千葉氏の結束はかなり乱れていたが、兼胤はそんな関係から岳父の禅秀についた。そして義嗣、満隆、禅秀らの反乱軍はまず鎌倉府を攻撃したわけだが、将軍義持と持氏らの連合軍にはとうてい及ばず、平定されてしまった。

まさに戦乱の世の習いというのか、この義持と持氏連合軍の間には平定のあとたちまちひびが入り、永享元年（一四二九年）九月、持氏は反幕府の姿勢を打ち出した。この挙に対し、管領の上杉憲実はそれを諫止したけれども公方は受け入れず、そればかりか憲実自身までが危くなり、彼は本国・上野の白井城に帰城してしまった。

持氏は次第に人望をなくした。そこに三浦時高の急襲を受け、さらには旧臣の憲実からも攻められ、永享十一年（一四二九年）二月、持氏は鎌倉の永安寺において自刃した。

これをもって鎌倉府は終えんしたのだった。

持氏の三人の遺子は、戦火を逃れて関東八家のひとつ結城氏朝をたよった。だが、安王と春王は将軍義教の命により斬られ、末子の永寿王だけが、管領だった細川持之のもとにあって助命された。

このように南北朝、室町の時代には、南軍と北軍、そして同軍、同族内での勢力争いがひきもきらさず、断えざる戦乱が繰り返されたのであった。

農民一揆の勃発と下克上時代

室町時代、農民たちもまた殺気だっていた。正長一年（一四二八年）、幕府はおひざもとの京都の農民の一揆を受けた。

その当時はもう日本の農業技術は日に日に改良されていた。とくに稲、肥料の改良、潅漑用水の開発はめざましく、そうした研究にもとづいて、農民同志の結束もまた高まっていた。南北朝時代の乱世で、荘園制度も崩壊し、農民は独自の力でさまざまの問題に取り組まなければならなかった。そこに協力体制が生まれ農民の間には一心同体という風潮が湧き起こってきた。彼らはその協力体制を「惣」といった。「惣」では寄合いを重ね、その代表を選んだり、掟を作った。そして「惣」はついに幕府に向かって一揆を起こすにいたったのだった。

鎌倉時代から本格化した貨幣の流通は、室町時代になると畿内各地に広がり、経済活動が刺激されると、そこには高利貸が暗躍するという逆弊害が発生した。そしてその被

害者はいつも農民と決まっていた。高利貸は「土倉（どそう）」と呼ばれ、主に酒屋とか豪族、寺院までもそれを行ない、金利は年六～七割というのが普通だった。幕府は「土倉役」という税金をかけ、それを有力な財源の一つとしたが、その弊害をこうむった農民はますます苦しい局面に立たされていった。

農民たちは一揆を起こした。徳政令を布けと要求しながら「土倉」を攻めて戦った。徳政令を要求した一揆こそ、わが国ではじめての最下層による一揆といえる。幕府はついにこれに折れ、徳政令を出したのであった。

こうしてこの時代、下克上の風潮はすべての分野でまき起っていたのである。

足利八代将軍の義政は一四歳で将軍になった。年齢にもよるのか義政は政治にまったく無関心で、ただ遊芸にのみ興味をもっていた。その後見をどうするか、将軍家はまた内紛となった。

応仁元年（一四六七年）には管領の細川氏と侍所長官の山名宗全の間で将軍ならびに管領の跡目にからむ争いから戦いが展開され（応仁の乱）、これがやがて戦国時代の引き金となった。全国の豪族たちがいっせいに覇を競い合うことになったのである。それらの戦乱のなかから、関東では北条早雲のおこした後北条氏、武田氏、そして里見氏などが台頭してくるのである。

里見氏の俊敏な房総支配

戦国時代の房総で戦国大名にまで成長したのは里見氏である。

■徳政令

中世に行なわれた債権・債務の破棄令。古代では大赦など朝廷の仁政を意味したが、一二九七年（永仁五年）、鎌倉幕府は御家人を貧困から救済するために、それまでの売買、質入れ地の無償返還と貸借関係の破棄を命ずる法令を出した。これを永仁の徳政といった。

そして室町時代にはいると、貨幣経済の発達と金融業者の勢力増大に苦しんだ畿内周辺の地侍、農民らは徳政一揆を起こして幕府に徳政を強要した。八代将軍足利義政の代だけでも前後一三回も徳政令が出された。守護大名でも領内に発布したり、土一揆みずからが実力で質物奪取、借用証の破棄などをする私徳政も行なわれた。そのため債権者たちは、徳政があっても難を免れるために、徳政文言を請文にかかせるようになった。

里見氏の祖先は遠く清和源氏の新田氏の流れであった。その後裔に新田義重があり、その子・義俊は上野国碓氷郡里見郷に住んで、里見を名乗った。これが房総里見氏の祖である。その後、九代を経て、里見家基の時代、関東公方であった持氏につかえ、将軍・義持が持氏を攻め滅ぼしたとき、家基は公方の長子・安王を奉じて結城氏朝に逃がれ籠城した。だが嘉吉元年（一四四一年）四月の結城合戦の際、家基は討死し、その嫡子・義実はようやく逃れて三浦に落ち、そこからさらに安房に渡った。

安房は東条氏、丸氏、神余氏、安西氏の四豪族が割拠していた。安房に逃れた義実はまず、安西景春のもとに身を寄せた。安西氏は義実の力を認め、それを借りてたちまちのうちに丸氏を滅ぼした。が、その直後、義実は恩人である安西氏を勝山に討って、その後、兵を金山に向け東条氏を破り、わずか二、三年のうちに安房一帯を手中におさめた。

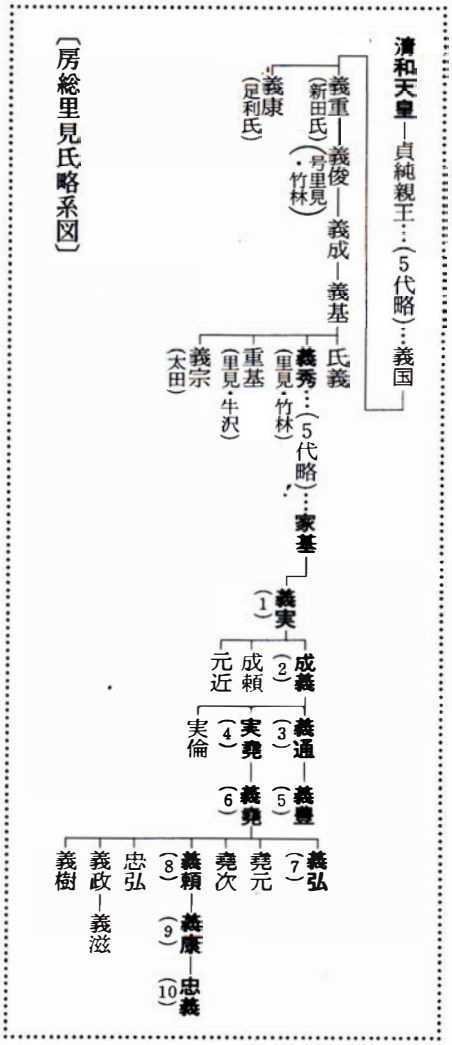
それから一〇年後の享徳三年(一四五四年)、鎌倉府から追われた持氏の子・成氏（幼名・永寿王）は古河において育てられ　古河公方となっていたが、山内家上杉憲忠を滅ぼして父の恨みを果たした。このとき、その武将のなかに里見民部少輔義実は、武田右馬助信長や下総の結城中務大輔成朝らとともに、その名を連ねた。翌康正元年十一月にも、武田信長らとともに上杉憲忠の弟・房顕を武蔵騎西城で攻め滅ぼした。

武田信長はこれを機に上総を押領し、庁南(現長生郡長南町長南宿字中城）と真里谷(現木更津市真里谷）に城を築いた。信長の娘は盟友の里見義実に嫁ぎ、これによって里見、武田の両軍は安房、上総を支配したのだった。北総の支配者・千葉氏はすでに大きく後退した。

しかし里見、武田の盟友関係は長くは続かなかった。庁南城に自ら住み、真里谷城をその嫡子・信高に守らせた信長は、上杉氏とのその後の戦いに破れ、もろくもその軍門に下ってしまったからである。

里見は孤立した。武田氏との背離はいかんともしがたく、明応六年（一四九七年）十二月、義実の嫡子・成義は祖父（母方）の真里谷城を攻め落とした。続いて生実城、万喜の土岐氏、池和田の多賀氏を攻めて南房総一帯をその支配下におさめる挙に出たのだった。

大永五年（一五二五年）、里見氏は成義の子供たちの時代になっていた。その次男の実堯は房総三国に兵をつのり、軍船数百隻を出して相模の三浦半島をおそい、北条軍を敗走させ、そのまま鎌倉に攻め入った猛将であった。もっともこの深追いは北条早雲の嫡子・氏綱にさえぎられて失敗し、実堯は軍船とともに安房に引き返したのだった。



〔房総里見氏略系図〕

群雄割拠の房総の戦乱

応仁の乱の後、日本は群雄割拠の動乱期に突入した。武田、今川、大友、島津らの守護大名や、後北条、長尾（上杉）、斉藤、浅井、朝倉、織田、長宗我部、龍造寺、有馬などの戦国大名は家臣団を組織して激烈な闘争をくりひろげ、織田信長、豊臣秀吉の天下統一までおよそ一〇〇年、それは続いた。里見実堯や北条氏綱の時代はまさにその渦中だった。

天文二年（一五三三年）七月、実堯は甥の義豊に殺害された。義豊は里見氏の嫡男・義通の子で、殺害の理由は家督の相続問題であった。これに対し実堯の長子・義堯は父の仇を打つために準備を急いだ。実堯が鎌倉で北条氏綱に敗北したあと、北条氏と里見氏がどのような関係にあったのか定かでないが、天文三年四月、義堯が義豊に大勝したとき、氏綱は義堯を支援したのであった。義堯は義豊を破ると自ら久留里城（君津市久留里）に住み、里見氏の主となった。房総里見氏の最盛期であった。

義堯と氏綱の関係もしばらくはきわめて親密だった。氏綱が鶴岡八幡宮の造改築をはじめると、義堯は房総の農民を派遣したり、氏綱が出兵するときは里見軍の兵をあずけた。

しかし、いかんせん世は戦国時代である。いつなにが起るかわからない。

北条氏の支援を得て上総に勢力を張っていた真里谷城の武田信隆はこれまた異母弟・信応と家督相続をめぐって内紛となった。このとき信応は真里谷城を拠点にして、小弓（現千葉市生実町）公方義明をバックにすえて戦いに備えた。小弓公方義明とは古河公

■小弓御所

一五一七年（永正四年）、下総小弓城（千葉市生実）の原胤隆（千葉氏の老臣）との領地争いに苦しんだ真里谷（上総武田氏）恕鑑は、古河公方足利高基の弟、義明（小弓公方）を迎え、さらに安房の里見義堯（義実の弟）などを味方としていった。足利義明は小弓城を奪い、居城として房総の諸城を制圧し、世に「小弓御所」と呼ばれるようになった。

方高房の弟で房総諸将にかつがれて勢威をふるっていた。一方の信隆は峯城（富津市中郷）、百首城（富津市竹岡）の二城を拠点とし、こちらは北条氏綱の支援を得て、異母弟は激突した。これを機に里見氏は小弓公方義明を支持していた関係で北条氏と絶交となる。いや最大の宿敵としてこの両者はその後にらみ合うことになるのであった。

弟の小弓公方義明の台頭を快く思っていなかった古河公方高基は、その嫡子・亀若丸（後の晴氏）に氏綱の娘をめとらせ、北条氏と同盟を結び、義明・上杉氏連合軍と対峙していた。

享禄四年（一五三一年）、高基は家臣から排斥され、晴氏が古河公方になった。そして義明の同盟者・上杉氏も衰退の一途をたどり、天文六年（一五三七年）七月には川越城が北条軍によって陥され、翌天文七年には関東の主帥をめざす小弓公方義明と、その阻止勢力である北条氏はこうして真向から激突することになった。第一次国府台合戦の口火であった。

天文七年十月二日、北条氏綱はその子・氏康とともに小田原城を出陣した。江戸に入り準備をととのえ、六日に江戸城を出発、翌七日、江戸川をはさんで国府台（現市川市）の義明方と対陣した。

これに対して小弓公方義明軍は、その子・義純、弟の基頼の三人が大将となり、椎津、村上、堀江、鹿島らの面々を前面に立て攻撃を開始した。氏綱の先陣は志水、狩野、笠原、遠山、伊東ら。戦況は終始、北条軍が有利に展開し、義明方の義純と基頼は戦死、義明の末子は里見氏をたのんで安房に退却した。孤立した義明に北条軍の武将で横井神助なる者は三人張の強弓に一三束もの矢をつがえて、義明の胸を射ぬいた。さすがの剛

勇の義明もこれには勝てず、七尺三寸の太刀を杖につき立ったまま壮烈な往生を遂げた。

勝利をつかんだ北条軍は東進して小弓の公方御所に入り、十日には上総の中島（木更津市）に到達した。北条氏の庇護を受けていた武田信隆はこれを迎え、一方、真里谷城にこもっていた異母弟の信応は氏綱の大軍に恐れをなし、戦わずして信隆に服属した。里見義実以来、友好関係にあった土気、東金の両城をもつ酒井氏も、このとき北条に属し、上総、下総の諸将は北条色を強めていった。

第一次国府台合戦の後、里見氏は小櫃川上流の上総久留里城を本拠地として義堯が住み、西上総の佐貫城を改築してその子・義弘に守らせた。房総の諸豪族たちは、北条、里見、そして千葉などに分かれひたすら戦いにあけくれていた。当然のことながら、この坂田の農民や馬も兵力としてかり出されたにちがいない。兵糧を徴収されたり、あるいは強奪されたりで、生きた心地がしなかったであろう。

第二次国府台合戦は永禄七年（一五六四年）正月七日にその火ぶたが切られた。

国府台の上に陣をしいたのは里見・太田軍の計八〇〇〇余騎、北条軍は二万余騎。しかし緒戦は里見・太田軍が優勢で、北条軍の勇将遠山直景らが討ち死した。勝利に気をよくした里見軍はその夜、酒をくみかわして休息をとったが、この情報をキャッチした北条軍は、その翌朝、里見軍の態勢がまだととのわないうちに急襲をかけた。

義弘はようやくにして上総にのがれ、太田康資は負傷して本国、岩村城にたどりついた。

このときの両軍の戦死者は里見軍五三二〇余人、北条軍三七六〇余人であったといわれる。余勢をかって北条軍はさらに東上、西上総に侵入し、池和田城（市原市）、小糸

城（君津市）をおとし、里見氏の拠点・久留里、佐貫両城にも迫った。

三船山で勢力挽回した里見氏

北条方は西上総の根拠地として砦を三船山に築いた。三船山は貞元、飯野、吉野の三村にまたがった一大丘陵地帯であった。藤沢播磨守、田中美作守らを配置し守らせ、機を得たならば里見氏の佐貫城と久留里城を攻撃させようとしていた。

これに対して里見方は、国府台の戦いのあとその勢力を衰えさせてはいたが、しだいにもり返えし、永禄十年（一五六七年）には西上総の地より北条方の軍を掃蕩しようとして三船山の砦を攻めた。北条方はこの里見方の挙動を察し、小田原に急をつげ、その援軍をもって逆襲に出ようとした。小田原ではこの報告に対し、源六氏資、源五資行、賀藤源左衛門らを派遣した。

こうして永禄十年九月、里見義弘は伏兵を八幡山（吉野山相野谷）におき、三船山の山麓にて開戦した。最初は北条軍が有利に展開した。しかし、里見軍は追われながらも突如として伏兵を繰り出した。北条軍は相野谷八幡山下の泥沼に追いつめられた。多くの将士が討たれ、太田氏資もこの戦いで戦死した。北条軍はついに砦を捨てて小田原へ退却した。

この三船山の山裾で展開された激戦によって、西上総地域の寺院や民家も多く戦火にかかって焼失した。坂田においても、多くの住家が焼失したといわれる。戦乱で最大の被害を受けるのは、いつの時代でも農民たちであった。

里見・北条両軍の戦場となった三船山（君津市役所屋上より）

三船山の戦で勢力を挽回した里見氏は、その後上総での勢力をより強固なものにして、下総の旧領土奪回をくわだてた。永禄十二年（一五六九年）ごろになると現在の江戸川流域方面、松戸、市川、国府台付近まで進出し、次々と郷村をおそっては市原の椎津城にしりぞいた。

往年の豪族千葉氏はもう形だけのものになっていた。その年の三月、北条氏と上杉氏とは和議が成立した。上杉についていた里見はこの和議によって孤立し、やむなく武田信玄と同盟を結び、北条氏に対抗することになった。ところが元亀三年（一五七二年）になると今度は北条氏政が信玄と同盟を結んだ。里見義弘はこの信玄の里見氏を無視したやり方に憤慨し、ふたたび謙信と握手することになった。

上総、下総の国境では北条をバックにした千葉氏と里見氏の両軍は必死の攻防戦をくりひろげた。元亀三年六月、里見軍は上総窪田山（袖ケ浦）に築城した。北条方は天正二年（一五七四年）十一月に、里見方の関宿城（下総）を陥し、翌三年八月には、氏政の命により氏繁のひきいる北条軍が東上総に進撃し、酒井胤治の土気城、東金城を攻め、北条に属させた。謙信はそのころ能登、越中の対策に力を入れ、関東まで手がまわらず、謙信と同盟を結んでいた里見義弘らは孤立し苦境に陥り、氏政との和を講じた。天正六年、謙信が急死、その年の五月、里見義弘もまた久留里城で世を去った。

里見氏はその後、弟の義頼が主となった。天正十五年十月、この義頼も没し、嫡子義康が十五歳で里見家をついだ。義康は館山城を築城した。大船の出入が便利で、家臣群も入れ、商工業者を居住させることのできる平野部の城郭――これは父義頼の宿願でもあった。天正十八年（一五九〇年）の夏、三年がかりの工事の末、館山城は完成した。

しかし、里見氏にとって、この館山城の完成はいわば〝あだ花〟であった。そのころ豊臣秀吉は北条打倒の軍を進めて石垣城に到着していた。義康はその軍に参加するため三浦半島まで海を渡り、三崎から鎌倉へとのぼり、小田原に入ったときは、すでに秀吉軍は小田原城を攻めていた。秀吉は義康の遅参をとがめた。そして義康はそれを理由に上総を没収され安房一国に封じ込められてしまった。

天正十九年七月、北条氏は滅亡し、秀吉の天下統一はほぼ完成した。千葉氏もまた北条氏と運命をともにした。一方、徳川家康が正式に江戸城に入城し、その年の八月十五日、家康は家臣を関東各地の要所に配置した。

秀吉に上総を没収された義康は外様大名なるがゆえに、慶長十九年（一六一四年）九月改易の令を受け、自慢の館山城を明け渡すことになった。間もなく城郭は破却され、かくして房総一円は徳川氏の直轄地となった。いま城跡には昔をしのぶ苔むした墓石が立ち並んでいる。

■幻の館山城（『房総里見誌』より）

石たたみ峨々と築上げ、堀は深渕に斉しく、矢倉高くして蒼天を仰ぎ、多聞麗々として見るに窮りなし。本、二の丸の造営結構言語に及ばず、内外の曲輪盤石を以て礎とし、大木を以て標とす、其の要害又耳目を驚かす。城外の武官小士の家宅美を粧ひ、農工商の居住まで丹誠を尽しければ、天正十六年春より企て、天正十八年庚辰の夏、悉く成就しけり。城を館山城と号し、郭を真倉といひ、大手を城下といひ、搦手を藤井といふ。並に上、中、下と町割して四民とも日々群集して繁昌す。幸ひ川の流有てこれに構へ、運送の便とせられて、この川入江となりて民家塩を焚く者多し。